

# あさか野ニュース

## 大堀相馬焼十六代目志賀喜宏さん

# 大震災から「復興」

## 郡山にあさか野窯開設

「郡山に新しい文化を」。浪江町の「岳堂窯」の十六代目志賀喜宏さん(56)は、東日本大震災、東京電力福島第一原発事故のため避難している郡山市で新たな窯を開き「あさか野焼」を開発した。郡山市の活気あるイメージを表現した華やかなオリジナル作品を多くの人々に伝えたいと、新天地でさらに夢を広げている。陶芸教室を開くなど、支えてくれた郡山市民との交流にも努めている。「もづくりの面白さを知ってもらうことで恩返しをしたい」と目を輝かせている。



ろくろに向かって作業する志賀さん

志賀さんは東日本大震災で避難移住し、2014年5月末から郡山市中野で「あさか野窯」を営んでいる。志賀さんは「本当の意味の大堀相馬焼はなくなっ

しまった」と語っている。浪江町に原料があったからこそ産業になる。だが、大震災で土地、産業ともに奪われてしまったので、今は「仮の伝統」になっただけと話していた。昔は地元、浪江町の材料しか使えなかったが、現在では社会が発達しどこでも作ること

ができるからだ。浪江町に戻れない。産業もとられてしまった。震災によって志賀さんは、二本松市、本宮市で避難生活を送った後、将来のことを考えて、瓦用の粘土が豊富な郡山市であさか野窯を再開した。

これからの課題は、後継者の確保。後継ぎがいらないということだ。泥をいじったり、力仕事が多いことが現代の人々に受け入れられないという心配もある。「この仕事は自分自身が楽しくないとやれない。私の作品を通して興味を持ってくれる人が出てくれれば」と語っている。

## 「郡山に新しい文化を」

### 第二の古里で新作次々

あさか野窯では、志賀さんによって大堀相馬焼の伝統と技術を生かした新たな焼き物が次々に生まれている。「あさか野窯」を営んでいる。

大堀相馬焼は、三つの特徴がある。一つ目は「青ひび」、二つ目は「走り駒」、三つ目は「二重(ふたご)構造」である。青ひびは、まるで稲妻のようで薄青い色は不思議な輝きを放っている模様だ。走り駒は、まるで分解写真のようで、馬の足などの筋肉がリアルに描かれている。江戸時代の絵師、狩野派が藩主の馬や奉納する馬を描いたと伝えられる走り駒は、320年の

時を超えて受け継がれている。二重焼が発明されたのは江戸後期の浪江だと伝えられる。手が熱くならないように底を二重にしているのは世界でも珍しく、とても貴重な文化である。志賀さんは、この伝統を基に新たな取り組みをしている。かつて郡山市では、瓦作りが行われており、そのため郡山市では、多くの粘土が採取できた。志賀さんはその粘土を利用し、あさか野焼を作ること考えた。

志賀さんは昔ながらの湯のみやきゅうすなどの他に、郡山市の華やかなイメージに合わせてモダンな作品を作っている。大堀相馬焼の技術を生かしたコーヒーカップなどは今の生活に合わせているだけでなく、大堀相馬焼の模様がうまく組み合わせられている。あさか野焼にはいくつかの種類がある。一つは、郡山の粘土100%のもので、全体が黒っぽいのが特徴。二つ目は50%のもので全体が薄黒い。三つ目は三割のもので、全体的に白い。この三つの陶器には模様を付けた物と付けていない物があり、どれも後何年かすれば売り出される予定だ。あさ



伝統の大堀相馬焼



あさか野焼の新作



右から  
飯谷 圭介(郡山一中)  
森 芳和(郡山一中)  
鈴木さくら  
(須賀川三小)  
安藤 愛加  
(須賀川三小)  
中央は志賀喜宏さん

### 私たちが作りました



絵付け体験の様子

### 陶芸教室で市民と交流

志賀さんは陶芸教室を開き、もづくりの面白さを伝えている。陶芸体験コースや絵付け体験コースがあり、初心者も大歓迎。年間コースも受け付けている。申し込み、問い合わせは、あさか野窯 電話024(973)6320へ。